Excursions. An excursion to a salmon hatchery will be arranged during the symposium. Visits to the spawning grounds of Japanese charrs and masu salmon will also be arranged after the symposium (10-13, October).

Language. The official language of the symposium will be English.

Registration fee. A registration fee of ¥25,000 will be charged for participants from Japan. $100 will be charged for those from the U.S. and abroad registration.

All correspondences until April 1986 should be addressed to: The convener, International symposium on charrs and masu salmon.

Hiroya Kawanabe
Department of Zoology
Kyoto University
Kyoto 606, Japan

会　　記・Proceedings

第2回　太平洋・インド洋の魚類に関する国際研究会議の開催結果報告（II）

前回ではシンポジウムの結果が報告されましたので，今回はエクスカーション，魚市場見学およびパーティーについて報告します．

遠路はるばる来日された皆様に日本の豊かな魚類相の一端なりとみていただきたいと考えまして，8月4日から8月10日までの7日間をエクスカーションの期間にあて，三宅島，函館，京都・舞鶴，京都・高知，沖縄の5つのコースを計画しました．各々のコースでは田中達男記念生物実験所，北海道大学水産学部，京都大学農学部・同水産実験所，高知大学理学部・同農学部，国営沖縄海洋博記念公園水族館・琉球大学理学部の関係者各位が現地での御世話を担当されました．

参加予定者に配布したサーキュラーに各コースでの予定や標本調査・採集についてのインフォーメーションをのせ，アンケートの回収を行いました．その結果に基づき切符の手配等を行いましたが，丁度夏休みの時期と重まりましたので切符の確保が難しく，事務局は無認可旅行代理店と化し，テンテコ舞いしましたが，なんとか必要な席を確保できました．

組織委員会が準備したエクスカーションとは別に旅行計画をたてて各地の大学，実験所を訪問された方々も多数いました．1ヶ月も前から来日した方もいますし，他の目的での来日を機会に本会議に参加した方もいます．特に会議の始まる一週間程前からは参加者が続々と来日し，事務局を訪問した後，各地へと旅立っていきました．また会議終了後，独自の計画で各地を旅行した方もいます．本会議では家族連れの参加も少なくなく，来日を機会に日本各地を旅行されたようです．

またこれらのエクスカーションとは別に築地の魚市場の見学コースを用意しました．これにはほとんどの方が参加し大盛況でした．なかには2回も行った方もありました．当初予定していた人数をはるかに上まわったため，7月30，31日，8月1日の3日間にわたり早朝の見学を行いました．

全てのエクスカーション，見学で事故や大きなトラブルもなく終了出来ました事は関係者各位の御尽力の賜といえます．事務局側の不行届で各地の方々に御迷惑をおかけした事も再三ありましたが，皆様の御協力で無事任務を終了できました．

国立科学博物館長主催によるレセプションが7月29日に上野の精養軒で行われ，8月1日には国立科学博物館分館有志によるガーデンパーティーが大久保で，8月3日には組織委員会主催によるサヨナラパーティーが開かれました．このうちレセプションとサヨナラパーティーには名誉総裁皇太子明仁親王殿下・同妃殿下の御臨席を賜わり，両会場とも和やかな雰囲気の内に各国参加者の懇談もはずみ，出席者に大変よい印象を与えたもようです．多くの方々から素晴しかったとの御手紙を頂いています．

各エクスカーション，魚市場の見学，パーティーにつきましてはそれぞれの担当者に執筆していただきました．なお，三宅島のエクスカーションの報告につきましては下手な和訳をしては原文の持ち味を表現するのが困難ですので，あえて英文で掲載させていただきました．

（事務局　Takeshi Shimizu 清水　長）

東京魚市場見学

今回の国際魚類研究会議が企画した excursions のなかで，東京築地の卸売市場（東京魚市場）の見学は会議期間中に行なわれた唯一のものであった．この会議に外国から参加する魚類学研究者にとっては，世界一を誇る東京魚市場の見学はかなり関心をひき，参加者も多いことが予想された．そこで，その計画と準備には実行委員会が直接あたった．

東京魚市場の業務は早朝から午前中が主であり，その間で特に多くの魚類を見ようとすれば仲卸段階（6時～

9時頃）での売場の見学が最適である．当方としても会期中であるため，見学後上野の会場に9時頃までに着くことを考えれば見学は7時～8時ということになり，市場での荷動きとうまく一致することになり好都合なのだが，反面，この時間帯の市場の中は殺気だった大混雑で，事情になれた者でも用心しないと危険なことが多い．このようななかを初めての外国人を連れて如何に見学するかということが頭を悩ます大きな問題となった．東京都の卸売市場管理事務所とも事前に打合せをし，見学コースの事前調査なども行ないながら実施計画が作られた．

見学は会期中に3回（3日間）行ない，今回の会議で宿泊施設となった3個所のホテルごとに，そこの宿泊者を中心に見学を行なうことにした．見学には毎回，責任者1名と見学者5名に1名の割で引率と説明を兼ねた協力者を実行委員会が委嘱し，これらの人達は前夜からホテルに泊り込んでもらい，早朝6時ごろホテルを出発し，魚市場の「勝どき門」から入り，市場内の混雑をさけて7時～8時の約1時間見学し，再び「勝どき門」から出て，上野の会場に向かうという手順で行なうことになった．

第1日（7月30日）は弥生会館グループで，井田　斉氏が責任者となり，7名の協力者が13名の参加者を連れて見学した．前夜に盛大な reception が催された翌朝であったためか，参加者が少なかった．しかし，市場内では協力者が1～2名の参加者を案内すれば良かったので雑踏の中でもうまく見学できたということだった．

第2日目（7月31日）はサンパーク・ホテルグループで尼岡邦夫氏が責任者となり，13名の協力者が約40名の参加者を連れて見学した．前日にくらべ参加者が多く，場内の案内には苦労されたようだった．

第3日目（8月1日）はアジア・センターグループで高木和徳氏が責任者となり，15名の協力者が約50名の参加者を連れて見学した．最後の見学日でもあり，評判を聞いて参加者は増え案内する方たちはかなり大変だったようであった．

以上のように3回の魚市場見学は事故もなく，計画された通り無事終了できた．参加された外国の方たちの評判もよく，非常に喜ばれた．これもひとえに責任者，協力者としてご援助いただいた方々のご尽力によるものと感謝している．見学者の中には市場で標本用の魚類を購入された人もあり暑い時だったので標本の固定などに走りまわられた協力者もあったようだ．中には2回も見学した人もあり，実行委員会としては予期以上の成果があったものと喜んでいる．

最後に協力者としてご援助いただいた方々23名のお名前を記して謝意を表したい（敬称略）．

藍沢正宏，赤崎正人，荒井孝男，石田　実，石原　元，毛塚浩章，佐々木邦夫，佐藤寅夫，佐藤陽一，猿渡敏郎，清水　長，須田有輔，杉崎宏哉，陳　賽斌，仲谷一宏，中坊徹次，西田清徳，林　公義，松浦啓一，村上剛，望月賢二，矢野和成，矢部　衛．

(Jin Hattori 服部　仁)

函館エクスカーション

今年の夏の函館は大変ホットであった．記録づくめの気温もさることながら，こんなに大勢の外人が押し寄せたのも研究室が始まって以来のことだろうと思われる．それは7月9日から始まり，国際魚類会議をはさんで8月29日まで続いた．その間の訪問研究者は13人で同伴者を含めると19人にもなった．以下，訪問者とその活動及び彼等の印象について到着順に紹介したい．

Dr. Graham S. Hardy (National Museum of New Zealand): 7月9日から7月15日までの1週間滞在し，主としてギンザメ類の標本を調査した．かねがね当研究室の標本をみたいとの手紙をもらっていたのだが，講座の院生が研究中だったので，標本の貸出を待ってもらっていた．そのため今度の会議を利用しての訪問となった．滞在中にニュージランドの魚類相について講演をしてもらった．彼が研究中のヘビギンポ科魚類は勿論のこと，ニュージランドやオーストラリア特産の red velvet fish (*Gnathanacanthus goetzeei*: Pataecidae) は美しいニュージランドの景色と共に我々の目を充分に楽しませてくれた．

Dr. Douglass F. Hoese (Australian Museum): 7月16日から7月20日まで5日間滞在．奥さんの Elizabeth さん，Ben と Felicity の二人の子供さんを同伴しての訪問で，私達と会うことと，観光を目的としていた．残念ながら天気に恵まれなくて奥さんや子供さん達には退屈な日々となったようだ．

Dr. John R. Paxton (Australian Museum): 7月18日から7月22日までの5日間滞在し，主としてクジラウオ目とソトオリイワシ科の標本を測定した．コンピューターで打ち出した彼の博物館の標本目録を見ながら，標本の交換を行なえたことは大変な成果であった．今後，標本管理のコンピューター化が進むにつれて，世界の魚類標本が一覧出来るようになり，標本交換が活発に行なわれるようになるだろう．机上だけで標本採集をする人が現われるかもしれない．彼からもらった科（シノニムリスト付）のコードを私達の研究室で使用してい

ソフトボールのスナップ，打者は Dr. Paxton（北海道大学水産学部グラウンド）．

淡水魚の採集（大沼公園にて）．

る California Academy of Sciences のものと比較してみたいと思っている．各地でコンピューター化が進むなかで，分類群の世界統一コードを提唱することが出来れば大変便利になるであろう．彼の講演はオーストラリアの魚類学の歴史及び魚類相に関するもので，非常に興味深かった．特に Dr. Ogilby は標本を浸したアルコールを飲んでばかりいたという話は大変愉快であった．昔，日本にもそんな魚学者がいたそうだが‥‥．また，スライドに写し出されたオーストラリア特産のアンコウ目の red handfish (*Brachionichthys politus*: Brachionichthyidae) にはその異様な形態と色彩に度肝を抜かれた．彼の英語は非常に歯切れがよく，よく理解出来た．英語力が著しく上達したように思えたのは私だけではあるまい．彼の希望で昼休みにソフトボールを楽しんだ．彼は6番ライトで，なかなか機敏だった．ジョギングの成果かもしれない．ボールを追いかけて一生懸命走っている彼の姿が思い出される．

Dr. Gregor M. Cailliet (Moss Landing Marine Laboratories): 7月24日から7月28日までの5日間滞在．昨春ロスの水族館でのサメ水槽のオープニングセレモニーで彼に会ったが，東京での国際会議に参加する時，函館へ行きたいと云っていた．彼は魚類の食性，年令，成長，生殖などの魚類生態に興味を持ち，彼のいる Montorey 湾の魚類を材料にした研究が多い．また，彼は近年話題となった論文を集めて一冊の本にまとめた「Readings in Ichthyology」の編集者の一人でもある．

Dr. Dannie A. Hensley (University of Puerto Rico): 7月24日から7月28日までの5日間，奥さんの Valentine と一緒に滞在した．La Jolla での Dr. Ahlstrom の稚仔魚のシンポジウムで彼と会い，国際会議への参加を勧めていた．彼は私と同じヒラメ類を研究し，もちろん訪問の目的は私が集めた多数のヒラメ科とダルマガレイ科の標本を調査することであった．タイプ標本を見た時には眼を輝かせて，これが君のあの新種かと大変感激していた．彼と私は FAO の species catalogue を共同で担当することになっているので，会って意見を交換することは大変有意義であった．函館魚市場でカワヤツメの干物を，そして近くの市場で魚を干すためのかご（カラス，ハエよけ）と，何故だか角形のフライパンを購入して喜んでいた．Puerto Rico では魚の干物をよく食べるそうだ．

Drs. Ernest H. and Lucy B. Williams (University of Puerto Rico): 8月4日から8月8日の5日間滞在．Puerto Rico 大学から琉球大学へ海外派遣研究員として来られている夫妻は共に魚類の寄生虫 (isopods) の研究家で，保存標本から外部寄生虫を熱心に採集した．口腔や鰓腔から引き出された寄生虫に，私達の標本がこんなに多くの寄生虫におかされていたことに驚いた．最近，函館水産試験場に転勤して来て，私達の標本の寄生虫を研究している長澤さんと最近の寄生虫学について話がはずんでいた．奥さんの Lucy さんは積極的で陽気な典型的アメリカ人であり，物静かであまり話すことを好まない彼とは好対象であった．

Dr. Hin-Kiu Mok (National Sun Yat-sen University): 8月4日から8月8日までの5日間滞在．主として寒流系の魚類を見ることを希望していた．中でも北海道の淡水魚に興味をもち，生きているトゲウオを是非とも見たいとのことであった．大沼と大学近くの河川で数尾のイトヨとトミヨを捕獲して大喜びで，まるで宝物を扱うような手付で標本にしていた．講演では台湾における魚類学の現状を紹介しながら，その中心を系統類縁関

係の分析方法に移していった．彼が留学していたニューヨークの American Museum of Natural History の Dr. G. Nelson の影響を十分に感じさせる内容であった．彼はスエーデンで開催されるヨーロッパ魚類学会に参加するために，名残惜しそうに函館を去って行った．

Dr. John E. McEachran and Mr. Tsutomu Miyake (Texas A & M University): 8 月 7 日から 8 月 10 日の 4 日間滞在．1983 年夏に La Jolla での Dr. Ahlstrom の稚仔魚のシンポジウムで会い，国際会議の時には北大を訪問したいと云っていた．彼は軟骨魚類屋であり，ソコガンギエイ属の多数の標本を夜おそくまで測定していた．彼に同行した三宅さんは彼の院生で，ヒラタエイ属魚類を研究中である．彼等は仲谷さん，院生の西田君や甲斐君と話がはずんでいた．彼の講演は現在の軟骨魚類の系統類縁関係についてであった．大変むつかしい内容であったが，時々入る三宅さんの通訳は極めて有難かった．

Dr. Stuart G. Poss (California Academy of Sciences; 現在 Gulf Coast Research Laboratory and Museum): 8 月 20 日から 8 月 23 日までの 4 日間滞在．主としてハオコゼ科，カジカ科，カサゴ科などのカサゴ目魚類を調査した．その間カジカ科魚類を研究している矢部さんや院生でカサゴ科の石田君と熱のこもった論議をしていた．この類の将来の研究方向に関する話し合いは非常に有意義だったようだ．彼の講演は彼の得意とする系統分類学の最新の方法論 (compatibility of characters) に関するものであった．形質の grouping, branching そして parsimony に関する問題点などで，はなはだ難解な問題ばかりであるのに加えて，彼の英語は私を大変苦しめた．自分のヒヤリング力の不足を十分に認識させてくれた．

Dr. Guido Dingerkus (American Museum of Natural History): 8 月 22 日から 8 月 25 日の 4 日間滞在し，彼の専門とするガンギエイ科魚類を調査した．魚類の軟骨の染色を行った人は誰れでも彼の名前をよく知っていると思う (Dingerkus and Uhler, 1977)．彼の講演は軟骨魚類の系統に関するものであった．頭骨，腰帯，肩帯などのスライドにはスケッチは 1 枚もなく，すべてカラーの実物写真であった．その見事な染色はさすがであった．彼に同伴した Robert A. Jureit はジョークの大好きなプロの写真家で，いろんな被写体に興味を示し，盛んにシャッターを切っていた．彼等はレンタカーで北海道の奥地へ旅立って行った．日本語の全く分からない外人にとって，日本の道路標識は非常に不親切である．仲谷さんは漢字をローマ字に対応させて理解させるのに苦労していた．

Dr. Robert H. Gibbs, Jr. (U. S. National Museum of Natural History): 8 月 25 日から 8 月 28 日までの 4 日間を奥さんの Frigger さんと一緒に滞在し，主にワニトカゲギス亜目魚類の標本を測定した．奥さんは彼のよき助手で，ずっと記録の手伝いをしていたのには感心させられた．私達は彼女を連れ出そうとしたが，いつも "No" で，お熱いところを見せつけていた．

今回の国際会議が始まる前からエクスカーションまでを振り返ってみて，机に向かうこともないほど忙しい日々の連続だった．しかし，彼等から非常に多くのものを得ることが出来たと信じている．函館にいては日頃，外国の研究者と接する機会が少ないため，今回の多くの訪問者は大変意義深いものであった．学生にとっては少なくとも外人に対して特別な緊張感がなくなったようにみえた．文献でしか知らなかった研究者と会って，直接話が出来たことは彼等にとってよい経験となった．また，彼等にホームランのK君，イカダンスのM君，魚ダンスのN君，チェアーボーイ（スピーチ付）のI君などを彼等が研究している魚と共に印象づけたことで，標本の借用，交換がスムースになり，研究や文献に関する情報が得やすくなるであろう．私達はいつも外国からの研究者に講演を頼んだ．彼等は当然という顔でこころよく引き受けてくれた．講演とその後の討論は世界の魚類学の現状に触れさせてくれると共に，私達に大いなる刺激を与えてくれた．

遠路函館まで来られるのは標本を見るためだと割り切っていたが，他にあまり見学するところもなく気の毒に思えた．見学や観光としては大沼公園，種苗センター，朝市場，函館山の夜景などで，後は院生も一緒に市内の寿し屋で会食というお決まりのコースだった．最近の外人は刺身，納豆，塩辛，ホヤなど平気で食べるのには驚かされた．米国やヨーロッパ各地で日本料理店や日本食料品を見かけたし，オーストラリアやニュージーランドもかなり普及しているからであろう．

暑かった今年の函館も最後の Gibbs 夫妻を送り出した頃にはすっかり秋風が立ち始め，長かった夏も終りを告げようとしていた．　(Kunio Amaoka 尼岡邦夫)

The Miyake-jima "Excursion"

The Miyake-jima excursion cannot correctly be called an excursion, because it began on May 10th and ended on August 16th. In all, 32 Conference-related guests visited the Tatsuo Tanaka Memorial Biological Station (TMBS), consisting of 27 scientists with some wives and children. The "excursion" began on May 10th, when Dr. Akinobu Nakazono

(Kyushu University) visited the Station to discuss plans for the symposium on reproductive ecology. This was followed by visits by Drs. Tetsuo Kuwamura (Chukyo University), Yasunobu Yanagisawa (Ehime University), and Yutaka Yogo (Kyushu University), who came to practice their symposium presentation. Dr. Yanagisawa spent an entire day of his valuable time assisting Dr. Moyer as a carpenter in the construction of a special cabin to house visiting scientists. The cabin was full of guests from June 10–August 16. Dr. Kuwamura returned in July to meet with Dr. Robert Warner. On June 6th, Lori Bell Colin (University of Papua New Guinea) arrived to assist the station director, Dr. Jack T. Moyer, in the administration of the station during the busy summer, as well as to continue her otolith work on settlement ages of *Amphiprion* spp. Lori is a TBMS veteran, having worked at the station in in 1974, 1975, and 1979. Other TMBS staff veterans also returned to help, including Martha J. Zaiser (University of California, Santa Barbara), Tomoko Yoshikawa (Oregon State University), and Kazue Asoh (Oregon State University). Karen Taylor (Eastern Illinois University) joined the staff as a special baby sitter to aid visiting scientists with children, and Mark Alexander (University of California, Santa Barbara) worked during the peak of the pre-Conference visitations as a temporary maintenance man at the station.

Prof. Robert R. Warner (University of California, Santa Barbara) arrived with his wife, Isabel F. Downs, and two children (Andy and Toby) on June 10th, staying until July 15th. Dr. Warner worked with Dr. Moyer on an intensive study of spawning synchrony in six species of reef fishes. Dr. Jeffrey M. Leis (Australian Museum, Sydney) and his wife, Dr. Susan Bullock (University of New South Wales, Sydney) studied larval fish settlement at the TMBS study site in Igaya Bay from July 10–20. At the same time, Martha Zaiser (Univ. Calif., Santa Barbara) continued her ongoing research on Miyake-jima's callionymid fishes.

Other pre-Conference visitors and their Miyake-jima interests included: Ms. Helen Larson (Northern Territories Museum, Darwin), who worked on Miyake-jima gobies and did lots of bird watching; Stan Blum (University of Hawaii), who was able to acquire a specimen of *Chaetodon nippon* for his osteological studies; Dr. Stuart Poss (Gulf Coast Research Laboratory, U.S.A.) and his new bride, Sachiko, who worked on Miyake-jima scorpaeniformes; and Dr. Robert M. Ross (Theil College, U.S.A.) who observed labrid fishes. Of the many pre-Conference visitors, Drs. Warner and Leis expect to publish their Miyake-jima findings as TMBS contributions, and Dr. Poss intends to return for long-term strudies of the island's Scorpaeniformes. Helen Larson enjoyed the island, ". . . especially the birds; the water is too cold!"

After the conference, TMBS was visited by Dr. Patrick Colin (University of Papua New Guinea)' who worked on spawning fishes; Dr. Douglas Y. Shapiro (University of Puerto Rico), who added observations of the Miyake-jima population of *Anthias squamipinnis* to his long-term study of that species; Terry Donaldson (Louisiana State University), who continued his work with Cirrhitidae by studying the reproductive behavior of *Cirrhitichthys aprinus* (his first spawning observations of hawkfishes); Mandy Holloway (British Museum of Natural History), who was thrilled by her first look at a *Mugil* sp. in nature (she is revising the genus) and who commented, "I didn't expect to see one north of Okinawa!" Prof. Adam Ben-Tuvia (Hebrew University, Israel) came to look at Mullidae. He is revising the family with Dr. John E. Randall. Professor Miles Keenleyside (Western Ontario University, Canada) and his wife Hilda engaged in snorkling and bird watching; Ronald Fricke (Staalt. Naturh. Museum, F. R. Germany) watched spawning callionymids and was sorry to miss his colleague and friend Martha Zaiser, who had left for the Philippines; Dr. Avi Baranes (Marine Biology Laboratory, Elast, Israel) enjoyed surveying the fishes of Miyake-jima, as did Professor George Barlow (University of California, Berkeley). Philip Hastings (University of Arizona, U.S.A.) studied *Istiblennius enoshimae*, and Dr. John E. Randall (Bishop Museum, Honolulu) arrived late to study mullids, but was discouraged because he was not allowed to spear specimens due to strict Tokyo Prefectural and Fishing Cooperative rules. Jack was able to get a few specimens from local fishermen, thanks to the cooperation of the Miyake-jima Fisherman's Cooperative.

Of the post-Conference visitors to TMBS, Avi Baranes hopes to return to study sharks and Phil Hastings wants to return on a post-doc to survey Miyake-jima's blennies, while studying the mating system of *Istiblennius enoshimae*. Comments heard from the visitors include: "I have never attended a finer conference!" (Doug Shapiro); "Our stay has become a memorable experience, and a most positive one." (George Barlow); "It (the symposium on reproductive ecology) truly was 'the symposium of the Century'!" (Bruce Carlson, Waikiki Aquarium, Honolulu). About Miyake-jima: "I want to come back and stay longer!" (Stan Blum, Terry Donaldson, Mandy Holloway, Avi Baranes, Stuart Poss, Phil Hastings, and Ron Fricke); and from TMBS-Miyake-jima veterans Lori Bell Colin and Martha Zaiesr, "I'll be back just as soon as I can!"

(Jack T. Moyer)

舞鶴湾内クルーズ，背景は京都大学農学部附属水産実験所．

京都・舞鶴エクスカーション

京都・舞鶴のエクスカーションの参加者は 14 名であった．最初 20 数名の参加予定であったが，炎暑の中でのお盆前の移動の困難さや他の計画との兼ね合いなどのため，取り消しが相次ぎ結局 14 名の参加となった．

8 月 4 日朝一行は東京を出発し，京都に一泊して京都と奈良の観光を済ませ，京都から国鉄の急行“丹後”で中坊徹次氏と細谷和海氏に引率されて，西舞鶴に到着したのは 8 月 5 日夕刻であった．西舞鶴駅へ車で出迎えた京大水産実験所側のものと相たずさえて宿泊所に入った一行はとるものもとりあえず，冷たいビールで乾盃して夕食に移った．

翌朝 9 時に 6 台の乗用車に分乗して，宮津（京都府海洋センター，府営および国営栽培漁業センター見学）—天橋立—経ケ岬—丹後松島—琴引浜の経路で見学と見物に出かけた．外国からの参加者には日本の進んだ養殖関係の飼育施設や研究体制がことの他参考になった様で，京都府海洋センターと国営栽培漁業センターでは，それぞれ案内して下さった本尾部長と森主任に質問が集中して，有意義な情報交換がなされた．以後は，皆んな東京での一週間の会議疲れを吹き飛ばす如く，リラックスして天橋立と丹後半島を心ゆくまで楽しんだ．天橋立を出て丹後半島に入ると急に人家もまばらになり，車の数も減り「日本にもこんなに人のいない，心が洗われるように美しい所があるのか」などとも言われ，とても印象に残ったようだった．それは後日筆者のところに来た参加者からの数通の手紙の中にもそうあったので，あながち外交辞令だけでもなさそうであった．実験所に帰り着いたのは日も沈みかけた 7 時過ぎであった．それから始まった歓迎の宴は夜の更るまで続いた．

8 月 7～8 日は朝 9 時から競りのある京都府漁連魚市場の見学，舞鶴湾内クルーズ，標本研究などに各自思い思いに参加して過した．

8 月 9～10 日にかけて参加者は三々五々舞鶴を去って行った．今後の情報や標本の交換を約束したり，再会を願ったりしながらの解散であった．一抹の淋しさが残り夏も終ったようだった．

最後にエクスカーション参加者とともに，会議の前後に当実験所を訪問された人々を記して筆を置くこととする：7 月 1～8 日 Dr. G. Hardy; 7 月 14～19 日 Dr. J. McEachran, Mr. T. Miyake; 7 月 18～23 日 Ms. Helen Larson; 7 月 21～26 日 Dr. and Mrs. Doug Hoese with two children; 7 月 22～24 日 Dr. W. Klawzewitz; 7 月 22～26 日 Dr. John Paxton; 8 月 5～10 日エクスカーション参加者 (Dr. M.-L. Bauchot, Dr. R. Bauchot, Dr. N. K. Al-Daham, Dr. Liu Lingyun, Dr. G. H. Burgess, Dr. W. C. Hamlett, Dr. Kim Ik-Soo, Dr. B. Malmqvist, Dr. and Mrs. Hensley, Dr. Matthias Stehmann, Dr. David Johnson, 石原元氏，谷修一氏)；8 月 11～15 日 Dr. and Mrs. Stuart Poss; 8 月 17～19 日 Dr. and Dra. E. H. Williams; 8 月 18～21 日 Dr. and Mrs. Robert H. Gibbs, Jr.　　(Izumi Nakamura 中村　泉)

高知エクスカーション

第2回太平洋・インド洋の魚類に関する国際研究会議の東京開催により，高知大学にも会議の前，エクスカーション期間およびその後の3回に分けて国外研究者12名の訪問があった．組織委員会から高知エクスカーションの依頼を受けて準備に着手したが，幸いにも3年前にバス・トイレ・冷暖房を完備した9客室とキッチン・ダイニングルーム・大浴場およびサロン付きのゲストハウスが完成しており，定員内である限りは宿泊にこの設備を利用してもらうことした．一泊1800円の低料金で，設備は良く，200 m以内に幾つかのレストラン，深夜営業のスーパーマーケット，リカーストアーもあり，利用者全員とくにビールの好きな Gibbs 夫妻には大変気に入ってもらえた様子であった．来訪に備えて申請してあった理学部の新標本室も，僅か60 m² ではあるが新式の移動式標本棚が6月に設置され，既設の固定棚式標本室110 m² と合わせて，分類関係の仕事を希望する研究者は理学部生物学科で，増養殖の基本技術等の見学は農学部栽培漁業学科で，魚類と甲殻類の稚仔飼育・増養殖の実態・生理生態学的研究面の見学は高知大学海洋生物教育研究センターおよび周辺の民間養殖場で行なうことにした．また，生時の日本産魚類を観察したいという希望に備えて，理学部のアクアトロンに土佐湾沿岸で採集した各種のハゼ・ハオコゼ・カサゴ・ネズッポ科魚類などを飼育しておいた．いずれも水族館等では全く見られない種であるため，行動を観察したり，生時色をカラーフィルムに納めたり，大変好評であった．

第一陣はオーストラリアの女性研究者 Helen Larson さんで，7月12日から18日まで滞在．その間センター付近の浦の内湾で投網およびキナルディンで多数のハゼ類を採集，とくに潜水採捕中に出会ったサツキハゼの大産卵群は我々にとっても初見の美麗な海中景観であった．また，彼女は御畳瀬漁港の船上で，未記載種ともみられるハゼ1種のほか，多数の標本を入手してカラー写真も撮影し，極めて稔り多いと推察される訪問であった．

第二陣は Iwamoto 博士 (CAS), Stein 博士 (Oregon State University), Poss 博士夫妻 (Gulf Coast Research Laboratory), Wolfson 夫人 (La Jolla), Kailola 博士 (Adelaide Univ.) および Bagarinao 嬢 (SEAFDEC) の7名で，8月5日～10日にわたり標本の調査，センターおよび養殖場見学，1日観光，レセプション，自宅招待 etc. etc.，充実した滞在であったと信ずる．とくに Iwamoto 氏を始めとする旧知の人々との再会は当方としても最高の喜びであった．また，レセプションの席上で交錯した日本，アメリカ，オーストラリア，フィリピンの歌々々‥‥も忘れ得ぬ想い出となった．

最後の訪問者は同じく旧知の Gibbs (Smithsonian Inst.) および Williams (Puerto Rico Univ.) の両博士夫妻で，8月20日から23日まで滞在．Gibbs は1未記載種を含むワニトカゲギス亜目魚類を調べ，Williams は九州-パラオ海嶺から新種として報告されたイトヒキアオメエソ他から多数の寄生性等脚類を発見し，それぞれ大変満足の様子であった．感心したのは両夫人の内助の功で，用意された観光を断わり，夫の研究を補助する姿に，かつての大和撫子を垣間見たといっても過言ではない．傑作なのは各人に一室を用意したにも拘わらず，各夫妻それぞれ一室を共有したことである．ゲストハウスにはセミダブルしか設置されていない．両夫妻の巨大さから，翌朝床上で目覚めたのは夫か妻か？アメリカでその結果を聞くのが今から楽しみである．

1カ月以上にわたる応対は重労働以上のものがあった．しかし，この触れ合いが後学の士に機会を生むと考えれば，もって冥すべしというのが現在の心境である．

最後に多大の協力を頂いた落合　明，谷口順彦，木島明博，町田吉彦，矢頭卓児（東京から添乗）の諸氏および学生諸君に深謝の意を表しつつ本エクスカーション報告を終える．

(Osamu OKAMURA 岡村　収)

沖縄エクスカーション

8月4日，羽田発7時の便にて沖縄向け出発．参加者全員良い時間に集合したのはさすがである．主催側からは，内田，戸田が見送り．Q・ゾンデルホフ嬢を付き添わせる．那覇到着後，亀井他の案内で紅型染めの工場見学をして琉大へ．海洋学科，吉野哲夫講師の御世話で琉大標本の調査．宿舎の沖縄国際センターへは，朝が早かったので早目に入る．

8月5日．早朝4時より行動開始．担当の亀井，ミュージックの他，吉野氏にも来て頂き，那覇魚市—糸満魚市—朝食(サシミ)—沖縄県水試と廻る．午後は自由行動としたが，水泳，ダイビングの希望が多く，近くのビーチへ案内する．皆さんエネルギッシュなのには大いに感心する．夕7時より沖縄随一の料亭「佐馬」で歓迎パーティを開く．主催の水族館側人員の他，地元沖縄側として，琉大の山里清理学部長，西島信昇海洋学科教授，吉野哲夫講師，沖縄県水試の崎山憲一場長，沖縄海外漁業K.K.伊佐次郎氏を御招待する．いずれも米国留学組の優秀な方々だから英語は堪能であり，マネージャーとしては大いに助かった．又，日本語の達者な米国人，ミュ

ージック博士も応援してくれ，パーティは大いに盛り上った．料亭「佐馬」も大出血サービスで特別室を提供してくれ，伝統的沖縄舞踊を紹介することが出来，大好評であった．これらの方々の他，マイクロバスの提供や7日の夜の第2回パーティを主催して頂いた当公園管理財団，宿舎の沖縄国際センターとBG海洋センター，東南植物楽園，玉泉洞ハブセンター，その他多くの施設やいろいろの方々から協力，援助を頂いた．この紙面を借りて厚く御礼申し上げる次第である．

8月6日，国際センター発，公園水族館の所在する北部へ移動．水族館の他，オープン前の熱帯ドリームセンターなど，公園内施設見学．タイミング良く体幅2.2m程のオニイトマキエイを搬入．状態良く，ゆったりと游泳するのを見て，飼育下の本種を見るのは皆さん初めてで，水族館としては大いに面目を施した．同日夜，先住のブルシャーク(3m)がこのイトマキエイを捕食してしまったが，これ又翌日の「シャークマン」達の話題となった．

8月7日．名護魚市—琉大海洋センター—沖縄県栽培センターを見学．午後は水泳，ダイビング．夜は公園財団主催のパーティ．玄人はだしの当館飼育係，宮原，上間の両人による古典三味線を皮切りに，沖縄民謡，空手道を披露する．泡盛を大量に空けた．

8月8日．水納島でのダイビングの後，東南植物楽園見学—沖縄国際センターへ．

8月9日．玉泉洞ハブセンター見学の後，那覇国際通りのショッピング．

8月10日．朝9時，那覇空港発東京へ．研修旅行終了．

本エクスカーションの参加者は以下の通り．Dr. and Mrs. C.E. Bond (Oregon State Univ.), Mr. B. Carlson (Waikiki Aquarium), Drs. G. M. Cailliet と D. A. Ebert (Moss Landing Marine Laboratories), Dr. G. Dingerkus (American Museum of Natural History), Dr. C. S. Johnson (Naval Ocean Systems Center), Mr. R.A. Jureit (professional photographer) および Dr. and Mrs. R. Lund の計10名．

現地では国営沖縄海洋博記念公園水族館が受入を担当し，同館長内田詮三が責任者となり亀井良昭，長崎佑，K. ミュージック，Q. ゾンデルホフの諸氏が協力した．

(Senzo Uchida 内田詮三)

国立科学博物館分館のパーティー

国際会議の参加者が，お互いに顔見知りとなった会期半ばの8月1日に新宿区百人町の国立科学博物館分館でパーティーが開かれました．このパーティーは科学博物館分館の皆さんが準備して下さり，料理や会場の飾り付けも非常に工夫した，手のこんだものでした．

パーティーは黒澤良彦動物研究部長の歓迎のあいさつで始まりました．パーティーは夕暮の芝生の上でくつろいだ雰囲気で開かれたため，あちこちに談笑の輪ができました．ビールの杯も次々とあけられ，主催者側は何回も追加注文をすることになりました．参加者が当初予想した100名を大幅に上まわる200名となったため，料理はアッという間になくなりましたが，皆さんお互いの交流を深めることができて，大いに楽しんでいました．会の途中でくじ引きが行われ，賞品が魚を料理する小さな人形だったため，参加者の爆笑を誘いました．パーティーは終了予定時刻を1時間近くこえて終わりました．国際会議の行事の中でも一番くつろいだ時間だったと，参加者から感想を聞き，主催者側の一員として大いに気をよくしています．最後にご協力を頂いた分館職員の皆様に厚く御礼申し上げます．

(Keiichi Matsuura 松浦啓一)

サヨナラパーティー

例年になく暑い日々が続いた真夏の国際魚類研究会議日程が終了した8月3日土曜日夜，出席した世界26か国の研究者は，交わした討論の余熱をさますかのように霞ケ関ビル33階の東海大学交友会館「阿蘇の間」でのサヨナラパーティーに集まった．夫人子供を交えて出席者総勢240名を数え，さしもの大広間もやや手狭にさえ感じたほど盛況であった．ほぼ定刻の7時に，皇太子殿下ならびに皇太子妃殿下の御来臨を賜わり，パーティーは開始された．東京水産大学多紀博士の司会によって，はじめに岩井組織副委員長から開会の挨拶があり，暑いさなかであったにもかかわらず各シンポジウムにおいて熱心に討議が重ねられ，赫々たる成果が上がったことを喜ばしく思うとともに，今後の太平洋・インド洋の魚類に関する研究が一層進展することを祈念するとの内容が流暢な英語で話され，参会者一同から盛大な拍手を受けた．続いて皇太子殿下の御発声を仰いで一同乾杯し，東海大学交友会館心ずくしの料理や美酒に舌つずみを打ちながら，お互いに大いに談論の花を咲かせた．宴たけなわの頃，アメリカ魚類両生爬虫類学会長 Cohen 博士からのメッセージが披露された．また，それまで個々に撮りあっていたにわか写真家のどなたかの発想であろうか，各シンポジウム毎に集まって記念写真を撮ることになり，ハゼのグループが皇太子殿下を囲んで最初に撮影したのを皮切りに，次々と賑やかな団体写真撮影会が続

いた.

宴なかばではあったが，皇太子殿下ならびに妃殿下は各国研究者の見送りをお受けになりつつお帰りになられた．御予定の時間をやや過ぎておられたようであったが，お名残惜しそうな御様子と拝察された.

予定した2時間ではお互いの話や意見交換が十分ではなかったようであったが，会場の都合もあって午後9時近く，上野組織委員長の閉会の辞をもっておひらきとした．しかし，大方の人は立ち去ろうともせず談笑を続け，あるいは残りものに福ありとばかり健啖ぶりを発揮していた．委員長以下組織委員会関係者は，出口近くに勢ぞろいし，盛大な拍手をもって帰る人を送ったが，これはおひらきになったことを残留組に知らしめる努力でもあった．おりしも，We are the world の曲が流され，閉会のムードづくりも図られたが，どこ吹く風とばかり談笑を続けるグループの数はなかなかに減らなかった．ある人は再会を約しているようであったし，他の人はこれからのエクスカーションの打ち合わせに余念がないようであった．とはいえ，立ち去り難かった人々も次第に会場を後にし，しばし国際魚類研究会議に占拠された感のあった霞ケ関ビルも人気がうすれて行った．昼間の火照りがようやくかげったアスファルト路を，とにもかくにも肩の荷を無事おろすことが出来たとの感慨を抱き，かつここまで漕ぎ着けた過程で支援して下さった各位に感謝しながら，組織委員会関係者は家路を辿られたものと思われる．なお，このパーティー開催にあたっては海洋水産資源開発センターから試食用の深海魚を提供して頂き，東海大学出版会から御援助を頂いた．記して深謝する．　(Fumio Takashima 隆島史夫)

宍道湖・中海の淡水化事業中止を求める要望書について

日本魚類学会会長は下記の要望書を昭和61年1月20日付で農林水産大臣と島根県知事に書留で郵送しました.

農林水産大臣
羽田　孜殿

日本魚類学会
会長　上野輝弥

宍道湖・中海の淡水化事業中止を求める要望書

宍道湖・中海両湖は本邦の海跡湖のうち霞ケ浦に次ぐ広大な水域で，本邦の代表的生態系であり多種多様な魚類の生息する学問的価値の高い水域であります．しかるに両湖の淡水化事業が計画され，実行に移される予定と聞き，日本魚類学会会員の中に憂慮の声が高まっております.

両湖が計画通り淡水化されると，霞ケ浦，児島湖，佐鳴湖などの実例で明らかな如く，湖水の自浄作用が妨げられ，栄養物質の循環系は非調和型となり，学問的価値の高い魚類相が破壊されてしまいます.

従って両湖の淡水化事業に賛成できず，その中止を要望致します.

昭和 60 年度第4回役員会

昭和 60 年9月20日（水）於東京水産大学．出席者：阿部，沖山，黒沼，佐藤，高木，多紀，隆島，富永，中村，松浦，丸山.

議事：1．報告事項．2．前回記録の確認．3．『国際会議』の終了にともない組織委員会より報告を受けた．4．宍道湖・中海の淡水化中止を求める要望書の文案を検討した.

昭和 60 年度第5回役員会

昭和 60 年 10 月 24 日（木）於東京水産大学．出席者：上野，岩井，阿部，新井，石山，沖山，高木，隆島，藤田，中村，松浦，丸山.

議事：1．報告事項．2．前回記録の確認．3．『国際会議』Proceedings の編集状況等について組織委員会より報告を受けた．4．宍道湖・中海の淡水化中止を求める要望書について，現地の状況変化，裏付資料の収集状況，会則との関係などの諸点を検討した結果，評議員会において討議することとなった．5．アユ・キヌバリのタイピンを作り，年会会場等で販売することにした.

昭和 60 年度第6回役員会

昭和 60 年 11 月 22 日（金）於東京水産大学．出席者：上野，岩井，阿部，新井，佐藤，隆島，富永，松浦，丸山.

議事：1．報告事項．2．前回記録の確認．3．『国際会議』Proceedings の編集状況等について組織委員会より報告を受けた．4．宍道湖・中海の淡水化中止を求める要望書について，評議員会に提出するための文案，会則との関係などを検討した.